

中村素堂

中国の書道史上名作として歴史に大書されている作品の中で、書聖王羲之の文と書の傑作「蘭亭叙」は、最初に「永和九年歳在癸丑」(永和九年、歳は癸丑に在り)と書き出しています。西暦三三三年、今から千六百年以上の古い時代のもです。これと同じく文も書も北宋の蘇東坡の作の「前赤壁賦」は「壬戌立秋七月既望」(壬戌の秋七月の既望——十六日)と書き出して、秋の明月の晩の舟遊のことを述べている。以上の二つは中国の代表的名文であると同時に、書作品としても輝く傑作である。

東坡の壬戌は北宋の元豊六年で、西暦一〇八三年、今から八九九年前のもです。今年東坡が揚子江を溯った赤壁の古戰場付近で船遊した年から十五回目的壬戌に当たります。蘭亭叙もこの赤壁賦も、お客とともに宴会をしているもので、前者は身を清めて流れの傍に座って酒を酌み詩を作ったもの、後者は江心の舟中で酒杯をあげ歌をうたったことを叙し、どちらも人生の哀感をひそめているものである。

で、この壬戌という年回りは還暦という言葉で判る通り六十年を周期として、六十一年目には同じ干支が回って来るので、私は大正十一年に齡二十二歳でこれに一度出合い、ことし八十二歳で二回目の壬戌にめぐりあった次第です。

そこで今から六十年前の壬戌の時、当時の書壇、詩壇の人々がどんなことをしたか、ほんのわずかの記憶を書いてみたいと思います。

赤壁賦は前と後と二篇あって、前篇は旧暦七月だから今の八月十六日のこと、後編は旧の十月だから今の十一月十五日のこと。どちらも夜、同じ揚子江での舟遊なのだが、その時分になると新聞にも

雑誌にも東坡の人物研究、ことに王安石と争った政治思想の問題、政争に敗れて左遷の生活裏で彼がこの風流を偷しんでいる心境が述べられ、また東坡は父も弟も一代の文豪で、「唐宋八家」と称される二王朝において八人を選べば、その三人は東坡父子兄弟をもつて占める名門であったが、その中で東坡は、儒門であると同時に宋代の禪者、在家の禪傑として学僧・詩僧との交遊が多く、後進の黄山谷からも異状な尊敬を受けていたことで知られている、と書く。また彼の書はそう承知して見なくても、気品の高いものが匂い出て圧倒してくるものがある。後年の禪僧が好んで東坡および弟子の山谷の書を学んだというのも首肯されるものである、としている。

大正十一年の壬戌にはこういう記事にあおられて、詩書の連中はこの遊びに因む催しをやつたらしい。なかには東京市のまん中のお茶の水へ小さな舟を出し酒肴を積んでいた人もある。当時、あの川は「神田上水」とは名ばかり、沿岸民家の汚穢を酌み取る肥し舟が上下していたんだから、かなり風流過ぎたのではないかと思う。

あまり上流書家のことはまだわれわれの知るところではなかったが、赤壁関係の小展をやつたり、詩会を開いたりしていたことは、当時のわずかしかなかった書壇雑誌や「万朝報」のような新聞には、よく載つたように覚えていられる。

ところで、こう書いて素堂自身はどうか。大した知識もないままに画箋全紙に野をひいて、それに楷書で赤壁賦を書いたことが記憶にあり、またその大真面目な前赤壁賦が戦後、石神井に移つてきた時にはまだあったから、まだどこかにある筈と思つている。まあもう一度こんな年にめぐりあえまいから、舟はともかく、ひとつ骨を折つて中国先哲にあやかるとしても書いてみたいと期している。本誌の読者諸君、何か記念に書きませんか。

〔筆聞雜記〕中村素堂隨筆集(昭和六十二年刊)より転載。 (一書紀)昭和五十七年一月